

祐天の名号書写のきっかけは東大寺の勸進であったと思われる。増上寺の学頭にあれば収入もあったと思われるが、隠遁の身では全くの布施に頼るしかない。学頭にならなかつた理由も、あるいは先の世間の噂によるものであったのかもしれないが、とにかく増上寺を去り、畿内歴訪したとき日本の仏教を憂えるような大仏の姿があつたのであろう。

祐天は自分のできることとして、浄業である名号の書写の道を選んだ。そして、数をこなして惜しげもなく庶民に施与したのである。そして「信者の信力」によるところの験益が名号に付随して伝わるようになっていったのである。

伊藤唯真先生は、先の祈祷だけでなく念仏の習俗化の過程の中で名号そのものにも「鎮魂慰撫・追善・除災招福」などの機能を指摘している（『講座日本の民俗宗教』二、三五九頁）。

『利益記』に収められている話でも、直接祐天の出でこない名号が一人歩きをする話が多く見られる。『利益記』には五十一話を載せる。そのうち、半数以上が名号の験益の話である。主として焼け残り、剣難よけ、水難よけなどの話で、病氣平癒の話まで存在する。

すなわち祐天の意図とは無関係に民衆レベルの信仰として、伊藤先生の指摘するような機能が求められたのである。今、祐天の意図したものが何であったかということが改めて問われるところである。

例えば『利益記』の中に「山田庄右衛門の妻得益の事」(上、四一丁)と題して、祐天が難産の妻に立ち会い「胎内の子も諸共に。同じ蓮花に化生して。一処俱会の快樂を受」けさせんと「名号をかけて本尊とし看病の人、病床を囲ひ。同音に念仏して臨終正念を祈りけるに」徐々に苦痛が薄らぎ母子ともに無事であったという話がある。祐天は臨終行儀に出かけていったのであるが、念仏を授けたところ病気が回復していったのである。このような話はほかにもある。これも祐天の意図に反した現世利益と言えるのではなからうか。ただ、祐天の行為すなわち病人を囲んでいる人々とともに念仏するという、病人に対する精神的効果まで否定することはできない。これによって病人が精神的な安らぎを得たことは事実であろうし、こうした意味での因果関係をも否定するつもりはない。

ここで私の言いたいことは、祐天は念仏で病気が治るとは決して言っていないということである。祐天は往生極楽という大義にのっとって病人の前に出たのであるが、結果として病人の気持ちを落ち着けることができたという念仏実践上の効果である。それは祐天の心が常に浄土に向いていたからこそできたのである。

『利益記』の内容から判断することは早計かもしれないが、著者が祐海であることと内容的に浄土宗の教義を逸脱しているものではないことなどを勘案して、現時点では事績の総論としては信すべきものと判断していることを付言しておく。後日証明されなければならないテーマであろう。

話を名号の驗益に戻すと、それは前述のような祐天の行蹟の積み重ねによる信者の仰信にほかならない。祐天がその仰信を手に入れることができたのは、一度は檀林主になれるまでの地位を手に入れたにもかかわらず隠遁したという事実であり、名利を捨てた真の姿を草庵という場所で示したことによるのであろう。もちろん全く名のない僧であればこうはいかなかったかもしれない。累得脱の話がすでに版本として発刊され、増上寺の学頭という栄職を捨てたということも相まって、いつきに祐天の道名が高まっていったことによるものであると想像できるのである。

そして、この祐天の名と行蹟が確実に伝承されているからこそ、現在も多くの名号が伝えられているのである。

### ●第二節 祐天の目指したもの

#### 第一項 寺院の復興と不断念仏道場の建立

祐天は、名号の書写によって得た布施や檀林主となってから得た金銭を、咸く寺院の復興に費やしたと言って良いであろう。

東大寺の復興に始まり、菩提寺をはじめとする郷里の諸寺院、そして関東の有縁の寺院の